
無色の追跡者

ふるーつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無色の追跡者

【Nコード】

N6620Q

【作者名】

ふるーつ

【あらすじ】

映画「漆黒の追跡者」の後日談。
佐藤刑事がコナンを追い詰めます。

(前書き)

佐藤刑事視点の話です。コナンがちょっと不甲斐ないかも・・・)

校門を出たところで、丁度彼らに会えた。元々、よく署に呼び出されている彼らに関しては、どのくらいの時間なら会えるか、とかの見立てはたてやすい。

「あ、佐藤刑事だー！」

「どうしたんですか？学校まで」

「何か事件か？」

気付いた彼らは、すぐに明るく反応してくれた。

「いいえ、今日は私、非番…お休みなの」

苦笑して返しておく。すると、彼ら 少年探偵団はそろって怪訝な顔をした。

「お休みなのに、どうしたの？」

「何か、僕たちに用があるんですか？」

「ええ、まあね」

曖昧にうなずいておいて、さっきから無言で不思議そうに見ている少年と目を合わせた。

「実はコナン君に、ちよつと聞き忘れたことがあったのよ。でも、事件には直接関係ないことだから、職務中に来るのもどうかと思っ
てね」

「……事件に、関係ないこと？」

初めて言葉を返したコナン君は、首をひねっていた。なにしろ、今まで自分が事件以外で彼と接触をもったことはない。

「ええ。悪いけど、ちよつと付き合ってくれないかな？」

「どうしたの？突然。しかも探偵事務所に来ないで小学校に来たってことは、おじさんや蘭姉ちゃんにも内緒ってことだよな？」

近場の公園のベンチに適当に座るなり、コナンは不思議そうに訊いてきた。

「うーん、私は内緒じゃなくてもいいんだけど、コナン君は内緒のほうがいいかなと思って」

「？」

小首をかしげる少年は、かなり可愛い。そっちの趣味はないのに、思わず顔がほころんでしまった。

「……この間の、東都タワーの事件。あのとき、君を襲った犯人について、興味があつてね」

「……！」

思わぬ話題だったらしく、彼は一気に表情を固くした。それを隠すためか、とつさに俯いたようだが、ほとんど意味はない。

「……どうしたの？いきなり。あの事件は、もう犯人も逮捕されて解決したはずじゃ」

「引つかることがあるのよ」

彼の言葉を遮るように、美和子は言葉を続けた。

「あの事件の被害者のひとり、新堂すみれさん。彼女の自宅に、犯人とは別の侵入者がいたような痕跡があつたわ」

「……え？」

美和子は、絵の具のチューブの話をした。同じ絵の具が、時間をおいて二度踏まれた形跡がある、と。

コナンは、眉間に皺を刻みつつ「そっか……」とつぶやいた。子供らしからぬ表情に、美和子の顔も引き締まる。

「もう一つ。その新堂さんの自宅に行く途中の道で、車のタイヤが突然パンクしたのよ。前輪が、両輪同時にね」

「両輪、同時に？」

「そう。しかも、その直後に近くの高架から、車が走り去ったわ。確証はないけど、こう考えられると思うの。何者かがあの高架で私達の車を待ち伏せ、タイヤを狙撃したとね」

「まさか……。誰が、何のために？考えすぎじゃないの？佐藤刑事」
高木刑事と同じことをコナンは言った。しかし、台詞は同じでも、

表情が微妙に違う。彼は、荒唐無稽な話に戸惑っていた。この少年は……そうじゃない。

「もう一つ。一度、犯人と目された人物を確保するために、私達はシヨップینگモールで張ってたわ。その男は通りすがりの女性を人質にとつただけけど、男が確保されたあと、その女性はいなくなっていたのよ。」

私はこう思ってるの。あの事件には、犯人以外に、なにか得体の知れない人たちが動いていたんじゃないかって」

難しい顔をして考え込むコナンの表情は、まるで証拠を突きつけられる寸前の犯人のようだった。

「コナン君、あの事件を単独で捜査してたわよね？毛利さんの助手だと言ってたみたいだけど」

「っ……それは……」

「君が東都タワーに行ったのは、その人たちに関係していたんじゃない？

君はひょっとして、その人たちのことを知っているんじゃないの？」

「……まさか。そんな人たちがいたなら、真っ先に佐藤刑事たちに知らせてるよ」

急に子供っぽい口調になったコナンだが、冷や汗をかいているのがわかる。

「言えない事情があったとしたら？例えば……そうね、その人たちの中に、警察の関係者がいるとか」

もしそうだとしても、公職を汚すような人間なら、美和子は容赦なく捕まえるつもりだった。

が。コナンの表情の変化は、美和子が予想していたものではなかった。どうやら、警察内部にその仲間がいる、ということではないらしい。

しばらく沈黙していたコナンだが、ふいに大きくため息をついた。力の抜けたような表情。

「……そうだね。佐藤刑事なら、頼れるかもしれない」

「じゃあ」

「でも」

話してくれる、と思ったが、コナンの言葉は続いた。

「今は話せない。悪いと思うけど、今はまだ、警察に頼れないんだ」
そう語るコナンは真剣そのもので、どうやら誤魔化そうとして
いるわけではないらしい。

「……君は、どうしてその人たちのことを知ったの？」

その問いに、コナンは視線を移した。林立する木に見えるが、多分何かを思い出しているんだろう。眉間に、さつきとは違う皺が寄る。おそろしく年齢不相応だ。

「……僕も、直接関わったことがあるからだよ。危うく殺されかけた」

「それって……」

「でも、まだ不十分なんだ。『奴ら』をぶっ潰すにはまだ足りない。だから……今は聞かないで。いずれ、必ず話すから」

「……それはやっぱり、犯罪組織なの？」

コナンは視線だけで肯定した。

「『表に出ない』ことが大前提の奴らだから、つながる系はかなり細いんだ。手繰り寄せするのも難しい。けど、絶対にぶっ潰してやる。……それが、……」

最後のつぶやきは聞き取れなかったが、コナンの強い決意は伝わった。美和子は一息つく。

「やっぱり、毛利さんや蘭ちゃんがいる所じゃなくて良かったわね。毛利さんたち、知らないんでしょ？」

知っていたら、コナンの単独捜査にはならなかったはずだ。彼は苦笑した。

「そりゃ、まず信じられないでしょ。現に、佐藤刑事以外の刑事さんたちは、気付かなかったみたいだし」

美和子は、肩をすくめて応じた。思えば、その不可解な事実に全て遭遇したのは、美和子を除けば高木刑事だけだ。彼は美和子の考えすぎだと思っっているし、そう思っても無理はない。

「じゃあ、いずれその時が来たら、教えてね。クビ覚悟で協力するわ」

「……それはちょっとなあ」

苦笑するコナンだが、「それはない」と否定されないということ
は、やっぱり仲間が警察内部にいるという可能性は考えているらしい。

「じゃあ、僕帰るね。遅くなると、蘭姉ちゃんが心配しちゃうし」

「ええ。気をつけてね。難しい話をさせて悪かったわ」

その後姿を見送りながら、美和子は心中だけで付け加えた。

(　　) 　　いずれ、君の本当の正体も聞かせてちょうだいね)

(後書き)

この間、「漆黑」を見返してたら無性に書きたくなった後日談。「
こんなの書く暇あるなら連載進めるよ」とは言わないで下さい・・・
筆休めです(汗)

書いてみて思ったんですが、あの話では組織、警察と関わりすぎだ
ったような気がする(好きだけど)・・・。
実際、頭いいから一応切り抜けることはできそうだけど、準備して
ないポーカークフェイスが苦手なコナンだったら普通にボロ出そうだ。
・・・とか思いながら書いてました(笑) 蘭関係と組織はコナンにと
って弱点ですよ。他者に対しては。

感想などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6620q/>

無色の追跡者

2011年2月5日11時40分発行